浜松市市民協働センター

ENGAWA

2011 年／特集号

■表紙のことば

8 月 6 日（土）～7 日（日）、村櫛町で「100 万本スマイルプロジェクトのひまわり祭」が開催されました。「100 夢プロジェクト」として、ひまわり 2525 プロジェクトが主催。もともと荒れ地だった場所は、苦労のかいあってひまわり畑に一変。会場に訪れた人たちは、ひまわりに囲まれてミニ動物園やライブイベント、ひまわりスタンプラリーなどを満喫。いつしかみんなの顔も、ひまわりのような笑顔になっていました。

目　次

■特集　協働の底力

宮城、福島両県の家族 30 名を。浜松市に迎え入れ、7 月 24 日～31 日まで行われた「心の耕しツアー」。この活動を通して、協働することによって産まれる、大きな力を考えます。
ページ 2～5

■エンガワトピックス

●心の耕しツアー in HAMAMATSU
ページ 6

●はままつ東北交流館オープン！
●協力者 1 万人達成！
ページ 7

■Check!!

まだ間に合うセンターお勧めの講座と事業をご紹介します。要チェック！

特集　協働の底力

「心の耕しツアー in 浜松」は市民活動団体と企業が協働し、行政のサポートを受け、たった３ヶ月半の準備期間で福島と宮城の両県から、被災した家族総勢 30 名を８日間、浜松に迎え入れた事業です。プログラムや食事は多種多様。これほどの事業を、これほどの短期間でなぜ実現できたのか、その謎を探ります。

悲しい顔の中学生

中学生の高田君が、協働センターに訪ねて来たのは、今年の３月 31 日。彼は、スマイリングリーン静岡というボランティア団体の代表を務めているといいます。この団体は、日頃から途上国の子供たちのために、不要になった文具を回収し、それを寄贈する活動を行っていました。

高田麟太郎君は、県立浜松西高等学校中等部三年生

その活動経験を、東日本大震災で被災した小中学生へと移し、被災地に文具を届けたいというのです。現地の、スポアートサポートみやぎと連絡をとり、被災地での受け入れ態勢は整っていました。

しかし、彼の顔が曇りがちだったのは、文具の回収場所が決まらないことにあったのです。公共施設を回り、行く先々で断られた結果、協働センターにたどり着いたのは午後 4 時を過ぎていました。協働センターは、市民活動団体の支援をするために設けられた施設。断る理由などありませんでした。

全国から集まった文具は、段ボール 200 箱を超えた。

こうして協働センターで、スマイリングリーン静岡の文具回収事業が、4 月 1 日から 4 月 24 日まで続けられたのです。

スポアートサポートみやぎ

文具回収を依頼したスポアートサポートみやぎは、震災前から、スポーツやアートを通じて子供たちの健全育成を図るための、社会貢献活動をしていました。震災後は、被災した子供たちの心のケアを中心に、暖かな食料の手配を全国に呼びかけるなど、自らも被災者でありながら、積極的な支援活動を展開していました。この活動にボランティアとして、浜松市在住の大学生が参加していたのです。

現地団体の提案を受けて

その学生は、静岡大学の大薗政伍君19歳。被災地から戻った彼は、阿部さんからの提案を受け、全国のどの団体よりも早く文具回収の要請に応えたスマイリングリーン静岡を訪ねます。

目的は 2 つ。1 つは、宮城の団体を支援するスポアートサポート東海を浜松に立ち上げること。2 つ目は、阿部さんを浜松に講師として迎え、講演会の開催を実現することでした。

えっ？中学生!!

大薗君は、高田君と出会い驚きます。「まさか、会員全員が中学生とは！」そうです、阿部さんも大薗君も、スマイリングリーン静岡が、中学生だけで構成された団体だということを知らなかったのです。逆に言えば、スマイリングリーン静岡は、中学生のみで構成された団体とは思えないほど、受け答えがしっかりしていたということです。

しかし、未成年者だけでは 宮城県から講師を招き、講演会を開催することは、高いハードル。自己資金もありません。そこで、大薗君は協働センターに声を掛けたのです。「助けてください」と…。

10代の若者に学べ！

大薗君は、スポアートサポート東海を立ち上げるため、仲間を募ります。そして、参集してきたのは、文化芸術大学の学生でした。たちまち数名の仲間ができたのです。学校の枠を超えた団体の誕生です。さらに、社会人も加わります。

こうしてスポアートサポート東海は結成され、スマイリングリーン静岡と共に、協働センターの登録団体になりました。そして、2 つの市民活動団体と、協働センターの協働事業として、阿部さんを講師とする講演会『メディアにながされていない被災者の声』が実現したのです。

10 代の若者たちは、協働して行う事業に何の違和感も示しませんでした。むしろ、互いに手を取り合うことを歓迎していました。

大人の団体同士であったら、こんなに早く協働事業としての講演会が実現できたでしょうか。企画書も予算書もない、熱意だけの事業の実現が可能だったでしょうか。

大薗政伍君。このツアーをきっかけに、自分の将来の軌道修正をし、教員の道を視野に入れている。

協働するとは、仲間を増やすこと。そんな純粋な気持ちの 10 代の若者たちだからこそ、震災後わずか 1 ヶ月で実現できたのかもしれません。

講演会の実現は、無理だと思っていた

後に大薗君は、「阿部代表には『がんばってきます』と言ったものの、まさか講演会が実現できると思っていなかった」と語りました。

実は、講演会開催の話は、別の施設にも相談したのですが、話もろくに聞いてもらえなかったため、半ばあきらめていたのだと…。

講演会後、場内は静まり返った

講演会は、震災から 1 ヶ月後の 4 月 12 日（火）午後 6 時から、宮城県より阿部さんをお招きし開催。講演の最後に「被災者が被災者を支援して 1 ヶ月。もう疲れ果てました。浜松のみなさん助けてください」と阿部さんは語りました。そのことばに、場内は静まりかえったのです。

それは、助けを求められても、何をしてよいのか分からない。最初の一歩を踏み出す、その術すら思いつかなかったからではないでしょうか。

講演会が終わっても、メディアにながされていない被災者の声は語り続けた。

宮城からお越しいただいた阿部さんの労をねぎらい、お酒を酌み交わす席を設けました（もちろん、中学生は帰宅しました）。その席で、「家族で過ごす、夏休みが心配。波の音だけで、言語障害を起こす子、余震の度に体が硬直する子。夏までに満足な食事が得られるのか…」と阿部さんは語り続けます。

さらに続けて、「浜松で親子総勢100 人くらいを、1ヶ月間受け入れて欲しい。避難ではなく、心を癒すためのキャンプとか、旅行として」それに即答できる者は誰一人いませんでした。

翌日、阿部さんを見送った大薗君は、再び協働センターを訪ねます。それは、被災地から夏休みに、子供たちを迎え入れる企画の相談をするためでした。とはいうものの、講演会の企画の時と比べると、大薗君の表情は不安がいっぱいでした。

スポアートサポートみやぎの代表を務める阿部寛行さん。

それもそのはず、総勢 100 人を1ヶ月迎え入れたとすれば、1食あたり 300 円で試算しても、270 万円もの経費が必要です。さらに、用意するバスは 3 台。バスの借り上げ料も最低 300 万円近く必要になるでしょう。宿泊費などを加えれば、1千万円を超える経費が必要だと、予想できたからです。

協働センターは、全面サポートをし、実現の可能性を一緒に探っていくことを決断しました。若者の熱意を、門前払いにすることはできなかったのです。

さらに、市民活動を実践する人材育成は、協働センターの重要なミッションの一つ。たとえ実現できなかったとしても、今回の取り組みは、市民活動を実践する人材育成に、効果をあげることができると確信していたからです。

可能性を求め、静岡県の副知事の元へ…。

当初、県立春野山の村を候補地に選定しました。これは、既に閉鎖されている施設なので、宿泊費を無料にし、経費の削減を図ることができることと、予約利用者がいないことが理由でした。

市会議員の山崎真之輔氏のご支援で、大村副知事に直接お話をさせていただきました。副知事からは、おほめのことばと同時に、使用できるようにご配慮いただけるご回答をいただきました。

しかし、現実には寝具や調理機器の不足。加えて施設の修繕。お

スポアートサポート東海のコアメンバーとなった、文化芸術大学の、大沢さん（左）と大前さん（右）

もてなしスタッフの確保などを考えた場合、宿泊費以上の経費が必要となる可能性があったため、断念したのです。

実現のための特効薬

会場を確保し、少ない経費で事業を実現させるため、協働センターは、多くの市民団体と市民、企業、そして行政を協働させていくという支援を全力でしました。

最初に、協働による実行委員会を組織します。市民協働センターの指定管理団体である NPO 法人魅惑的倶楽部が、50 万円の自己資金を拠出し、実行委員会の核を形成。そこにスポアートサポート東海、スマイリングリーン静岡を加え、さらに NPO 法人地域づくりサポートネット、NPO 法人三遠南信アミ、株式会社東海トラベル、はままつ災害ボランティアネット、浜松市社会福祉協議会で心の耕し実行委員会を結成したのです。

実行委員会として、社会福祉協議会から 30 万円、静岡県からはおよそ 50 万円、赤い羽募金からおよそ 100 万円の補助金を獲得します。しかし、100 人 1ヶ月を受け入れる経費には、遠く及びません。そ

こで、50 人を 8 日間受け入れるという事業変更の決断をしたのです。

実行委員会と協働センターは、食材提供を企業に依頼。結果、株式会社や組合、NPO 法人など 27 団体から食品の提供をいただきました。個人の寄付や食材提供、活動への支援は 150 人以上。その中には心配事相談を担当する、医科系大学の准教授も含まれていました。浜松市からは市長や、家康くん、天竜区長も激励に駆けつけてくださいました。

企業では、株式会社呉竹荘の協力は絶大でした。持ち込まれた食材の全ての調理、市内観光のための１日分のバスの提供、ランチ 1 食とちびっ子カラオケ大会の開催。これらを含め、全日程の宿泊を、１泊朝食付きで一人 3,500 円で提供していただいたのです。

家康君は、年代を超えて、県域を超えて、人気者になりました。

えっ！参加者１人！！

浜松で、受け入れ態勢が整う一方で、出発２日前まで参加申し込み者は、小学３年生の男子ただ一人でした。現地の教育委員会へはチラシの配布を依頼し、各避難施設にも張り紙を出していただきました。しかし、現実には情報が全く届いていなかったのです。行政は、仮設住宅への入居などの手続きに追われ、ツアーどころではなかったのかもしれません。

そこで、現地の NPO 法人などに情報を流すことで、瞬く間に参加者が集まったのです。また、実行委員自ら、浜松市に避難されているお宅を訪問し、お誘いしました。

心の耕しツアーが教えてくれた

さまざまな団体が協働するということは、１＋１が２になるのではなく、無限の力になることが証明されたような気がします。また、現地での情報伝達の結果から、日頃からの市民活動の実践が、有事のときには、地域の真の力になることも証明してくれたのではないでしょうか。

今後、復興の早い被災地には、「震災前から活発な市民団体が数多く存在した」そんな結果が見えてくるのかもしれません。

浜松市はどうでしょう。外の政令指定都市と比べ、NPO 法人が少ないのです。この広大な市域で、未曾有の災害が発生したら、真の力を発揮するのは、やはり東北同様、市民団体ではないでしょうか。

その時の準備を始めなければなりません。その第一歩が、一人一人が何でもいい、日頃から市民活動に参画する。また、各団体は協働の輪を広げる。企業が支援する。そんな日常の営みにこそ、大きな意味があるのだと思いませんか。

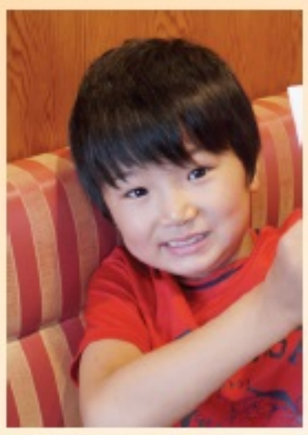
憩いの家で、おいしい春野茶を。天竜区長も激励

炭焼きレストランさわやか。ハンバーグに歓声

■協働いただいた企業／各種団体（順不同）

株式会社呉竹荘、株式会社東海トラベル、株式会社さくら交通、東海ビル管理株式会社、株式会社知久、ダイドードリンコ株式会社、株式会社伊藤園、遠鉄ストア有志、株式会社ベル、山惣清水商店、浜松オートレース場東売店、焼き鳥おかわり、丸鰻うなぎや、春野町農業経営振興会、理美容有志、ピッツアなお、スターバックス浜松市内全支店、貴布祢ラーメン、炭焼きレストランさわやか、スパ３世、外山本店、お菓子のとやま、NPO 法人静岡県作業所連絡会・わ、株式会社マルマツ、舞阪漁業協同組合、天竜川漁業協同組合株式会社サツ川製作所、浜松科学館、浜松医科大学、聖隷クリストファー大学、まごころ楽座とも、はままつ東北交流館、天竜船明湖畔の家、オークラアクトシティホテル浜松、ウォルナッツ・クレイワークスタジオ、浜松マジシャンズソサイアティ、ソーラーバイク実行委員会、ホリスティックアロマアカデミー、航空自衛隊広報館、うなぎバイファクトリー、その外心優しい多数の市民の皆さん

ENGAWA　トピックス



浜松によく来てくれたね。ありがとう。

特集で紹介した「心の耕しツアー in 浜松」に、宮城県と福島県から参加されたみなさんの、すてきな表情を紹介します。振り返れば、参加されたみなさんも、このツアーで初めて出会った、見知らぬ者同士。不安もあれば、さまざまな県や市から、たくさんのお誘いもあったことでしょう。

その中から浜松を選んでいただいたみなさん、心から「浜松に来てくれて、ありがとう」と、いいたいですね。浜松に滞在した８日間で、心は耕されたかな？

また、どこかであえるといいね。

絆
日本

浜松市民と東北のみなさんとの絆を結ぶ…。

はままつ東北交流館オープン

東日本大震災の被害を受けて、東北地方から浜松に避難されているみなさんは、知人もなく、土地勘もないため孤立してしまいがちです。そんな課題を解決するために、避難されてきたみなさんや浜松市民が、自由に交流していただける場所ができました。それがはままつ東北交流館です。この交流館は、浜松市の委託を受け、NPO 法人地域づくりサポートネットが開設。

モール街のモールプラザサゴー地下に設けられた施設内には、東北地方の物産も販売されています。もちろん、どなたでも買い物をすることができます。

また交流館で働く、佐藤館長をはじめとするスタッフのほとんども、福島県から浜松市に避難されて来たみなさんです。ここから浜松と東北地方の市民同士の絆が結ばれることを期待せずにいられません。子育てサークルも始まりました。

今年 12 月までの期間限定。みなさん、出掛けてみませんか。

シールは、自動車や自転車に貼付けていただいたり、ホテルのフロント付近に貼付けていただいたり、協力者が増え続けています。

協力者１万人達成！
みなさん、ありがとう!!

みなさんから、ご協力をいただいている「家康くんシール」の協力者が、６月末で１万人に達しました。そこで、７月１日の市制記念日に、市制 100 周年を記念し、浜松市社会福祉協議会へ、総額で 100 万円となる寄附をしました。多くのみなさんのご協力に感謝します。引き続き、目標の３万人の協力者を目指します。

まだ、お求めいただいていないみなさん、ご協力をお願いいたします。

※家康くんシールは、被災地へのボランティア活動を支援する経費を集めるために、協働センターが制作したシールです。市制 100 周年の記念品としていかがですか。

※１枚 120 円で、協働センターなどで販売しています。100 円がボランティア支援の寄附金になります。

●中山間地域交流ネットワーク事業

浜松市市民部市民協働・地域政策課から、浜松市市民協働センターが受けた委託事業です。中山間地域と都市部住民とを引き合わせ、交流と地域活性化を図ることを目的としたものです。

人口減少・少子高齢化により地域の文化活動維持が困難になりつつある中山間地域と、核家族化やコミュニティの衰退により地域文化活動の場を失いつつある都市部が交流を図ることで、「中山間地域に活力」を、そして「都市部には癒し」をと双方にとってメリットのある助けあいの輪を広げることを目的としています。

交流対象は、浜松市の中山間地域と、都市部は浜松市に留まらず浜松市外・静岡県外をも対象とし、首都圏との交流についても促進しています。また、企業についても積極的に交流に参画していただきたく思っています。

つながることのなかった人と人、まちとまちをつなげ、広域における多様な文化・事業の交流を図ることで、地方の活性化、ひいては日本全体の活性化をも視野に入れた事業です。詳しくは、市民協働センターへお問い合わせください。

●夢創造人養成講座

平成22年4月にオープンした浜松市市民協働センターの事業としてスタートした講座。地域の市民活動を実践し、かつ広域的な視野を持ち、他の団体や行政、民間企業との間に立って支援ができる人材を育成するために実施されるものです。

昨年は、天竜区をステージとし開催。今年は北区引佐町にスポットを当て、地元の人たちとの交流を通し、新しい地域の魅力を見つけ、創造力を駆使して、地域に活力を与えるために開催します。

講座は始まりましたが、追加受付中。詳しくは市民協働センターへお問い合わせください。

発行　浜松市市民協働センター　〒430-0929　浜松市中区中央一丁目13-3
電話　053-457-2616　FAX　053-457-2617
URL http://www.machien-hamamatsu.jp/　E-mail kyoudou@machien-hamamatsu.jp